

2 0 2 5 年 度

(後 期)

国 語

注 意

1. 受験番号と氏名は、解答用紙の所定の欄に必ず記入しなさい。
2. 解答用紙に、正しく記入・マークされていない場合は、採点できないことがあります。
3. 解答は、解答用紙の解答欄にマークしなさい。
4. 所定欄以外にはマークしたり、記入したりしてはいけません。
5. この冊子の余白は、下書きに使用してもかまいません。
6. この冊子は全部で22ページです。
7. この冊子は持ち帰りなさい。

問題一

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

「何でも食べられる人」がいるとします。これも栄養物が少ない環境を生き延びる上ではきわめて有利な能力です。けれども、もちろん「何でも食べられる」はずがない。私たちの周りには食べられないもの、毒性のあるものがいくらかもあるからです。その条件でなお「何でも食べられる人」がいるとしたら、それはその人が「食べられるもの」と「食べられないもの」を先駆的に識別できているからです。

「どこでも寝られる人」もそうです。どこでも寝られる能力はストレスフルな環境を生き延びる上できわめて有利な資質ですけれど、もちろんどこでも寝ることは現実には不可能です。私たちの周りにはうっかり眠り込むことのできない種類の危険に満ち満ちていますから。それでも「私はどこでも寝られる」と公言している人がいたら、それはその人が「寝てもいい場所」と「寝てはいけない場所」を先駆的に識別できているからです。

そういうものなのです。私たちがある種の能力を発揮できるのは、その能力が発揮できるようにする予備的能力を有しているからです。その能力を発揮してもよい場所と時間を言い当てることができる能力が備わっているからです。能力は二段構えに構造化されている。

私たち辺境人にとって、外来の制度文物は貴重な資源です。一粒も無駄にすることが許されない。それゆえ、最大限の開放性を以て外来の知見を受け容れなければならない。けれども、外来のものの中には、受

け容れたいもの、受け容れることによって私たちが損なわれるものが含まれています。それを無意識的に回避する能力にサポートされていないければ、無防備なほどの開放性は確保できない。

資源が豊かな環境であれば、そのような予備的な能力は必ずしも要求されないでしょう。目の前にあるものを気分次第で取る。不要だと思えば捨てる。捨てたものが有用であることに後から気づけば、また次の機会に拾う。「その有用性がわからないもの」について、別に過剰に開放的になってみせる必要もない。資源が豊かであるというのはそういうことです。そして、私たちはそうではない。文化資源は中華文明圏から取り入れなければならないということが辺境の条件であった。ですから「その有用性がわからないもの」について、その有用性や意義を先駆的に知る能力を開発することが私たちにとっての民族的急務だった。

私は別にそれほど奇妙な話をしているわけではありません。資源の貧しい環境を生き延びるために人間が「その有用性や意味が現時点ではわからないもの」の有用性や意味を先駆的に知る能力を発達させるのは類的にはごく合理的なふるまいだからです。

(注1)

このような能力を選択的に開発する人のことをクロード・レヴィ・ストロースは「ブリコロール」(bricolleur)と呼びました。「ありあわせのもの」しかない、限定された資源のうちで生活している野生の人々を指してこの言葉を使ったのです。「ブリコロール」とは辞書的には「便利屋」のことです。そこらにあるありあわせの道具とありあわせの材料で器用に棚を作ったり犬小屋を造ったりする人のことをフランス語でそう呼びます。

「野生の人」は本質的にプリコロールです。彼らの世界は資源的には閉じられています。「ありもの」しか使えない。通販で取り寄せたり、コンビニで買い足したりすることができない。それゆえ、プリコロールたちは「道具」の汎用性、それが蔵している潜在可能性につよい関心を示します。

(注2)

『野生の思考』という二十世紀の知的パラダイムを一変させた主著の冒頭でレヴィ・ストロースは「プリコロール」について書きました。ヨーロッパの「文明人」たちとは別の種類の知、「野生の思考」によって思考する「未開人」たちがいる。彼らの知はどのように効率的に機能しており、それが彼らの人間的世界の秩序と尊厳をかたちづくっているか。レヴィ・ストロースはそれを知らしめることで、自民族中心主義のうち(1)にまどろんでいたヨーロッパ知識人に冷水を浴びせました(2)。諸君が唯一の人間的知と思っているものとは別の仕方(3)で機能している知が存在する。「人間の生が持ちうるすべての意味と尊厳」を自分たちの集団だけが独占しており、他の集団はそれを欠いていると考えることはあまりに傲慢である。「人間性はその歴史的・地理的な諸様態のうちのただ一つにすべて含まれていると信じていることができるためにはよほどの自民族中心主義と無思慮が必要である。」

レヴィ・ストロースはそう書きました。

(3) 野生の人々には固有の知があります。それはあらかじめ立てられた計画に基づいて必要な道具や素材をてきばきと集める能力ではありません。「ありもの」の「使い回し」だけで未来の需要に備える能力です。ジャングルを歩いていると目の前にさまざまなモノが出現してきます。

それは植物であったり、動物であったり、無機物であったり、有機物であったり、人工のモノであったり、自然物であったりします。その中のあるものを前にしたときに「プリコロール」は立ち止まります。そして、「こんなものでもいつか何かの役に立つかもしれない」と言って、背中(4)の合切袋(5)に放り込む。

なぜ「いつか何かの役に立つかもしれない」ということがわかるのか。ジャングルの中に、彼の視野の範囲には「その用途や実用性がわからないもの」がそれこそ無数にあったはずで、どうして、「その用途や意義が知れぬ」無数のもの(6)のうちで、とりわけ「それ」が彼の関心を惹きつけたのでしょうか。

先駆的に、その有用性を、知っていた、という言い方でしかこの行動は説明がつかえません。そして、実際に彼は「いつか何かの役に立つかもしれない」と思って拾っておいたものについて、あとになって「ああ、これを取っておいてよかった」と嘆息したという経験を繰り返してきた。そういう反復を通じてしか、そのような能力は強化されませんから。

人間には「どうしてよいかわからないときに、どうしてよいかわかる」能力が潜在的に備わっています。その能力は資源が潤沢で安全な環境では発達しない。「どうしてよいかわからない」ときにでも、「どうすればいいか」を訊きに行く人がいたり、必要なもの(7)を買い足しに行けるなら、先駆的に知る必要はない。けれども、資源が乏しい環境や、失敗したときに「リセット」することが許されないタイトな環境においては、「どうしてよいかわからないときにも適切にふるまう」ことが生き延びるために必須のものになる。

「学び」という営みは、それを学ぶことの意味や実用性についてまだ知らない状態で、それにもかかわらず、これを学ぶことがいずれ生き延びる上で死活的に重要な役割を果たすことがあるだろうと先駆的に確信することから始まります。「学び」はそこから始まりません。私たちはこれから学ぶことの意味や有用性を、学び始める時点では言い表すことができない。それを言い表す語彙や価値観をまだ知らない。「まだ知らない」ということがそれを学ばなければならない当の理由なのです。そういうふうな順逆の狂った仕方です。「学び」は構造化されています。

「学ぶ力」というのは、あるいは「学ぶ意欲（インセンティヴ）」というのは、「これを勉強すると、こういう『いいこと』がある」という報酬の約束によってかたちづけられるものではありません。その点で、私たちの国の教育行政官や教育論者のほとんどは深刻な勘違いを犯しています。子どもたちに、「学ぶと得られるいいこと」を、学びに先立って一覽的に開示することで学びへのインセンティヴが高まるだろうと彼らの多くは考えていますが、人間というのはそんな単純なものではありません。「学ぶ力」「学びを発動させる力」はそのような数値的・外形的なベネフィットに反応するものではありません。

「学ぶ力」とは「先駆的に知る力」のことです。自分にとってそれが死活的に重要であることをいかなる論拠によっても証明できないにもかかわらず、確信できる力のことです。ですから、もし「いいこと」の一覽表を示されなければ学ぶ気が起こらない、報酬の確証が与えられなければ学ぶ気が起こらないという子どもがいたら、その子どもにおいてはこ

の「先駆的に知る力」は衰微しているということになります。私たちの時代に至って、日本人の「学ぶ力」（それが「学力」ということの本義ですが）が劣化し続けているのは、「先駆的に知る力」を開発することの重要性を私たちが久しく閑却かんきやくしたからです。

今の子どもたちは「値札の貼られているものだけを注視し、値札が貼られていないものは無視する」ように教えられています。その上で、自分の手持ちの「貨幣」で買えるもつとも「値の高いもの」を探しだすように命じられている。幼児期からそのような「賢い買い物」のための訓練を施された子どもたちの中では、「先駆的に知る力」はおそらく萌芽状態のうちに摘まれてしまっているでしょう。「値札がないものは商品ではない」と教えられてきた子どもたちが「今はその意味や有用性が表示されていないものという意味や有用性を先駆的に知る力」を発達させられるはずがない。

けれども、この力は資源の乏しい環境の中で（ということは、人類が経験してきた全歴史のほとんどにおいて）生き延びるために不可欠の能力だったのです。この能力を私たち列島住民もまた必須の資質として選択的に開発してきました。狭隘きょうあいで資源に乏しいこの極東の島国が大国強国に伍して生き延びるためには、「学ぶ」力を最大化する以外になかった。

「学ぶ」力こそは日本の最大の国力でした。ほとんどそれだけが私たちの国を支えてきた。ですから、「学ぶ」力を失った日本人には未来がないと私は思います。現代日本の国民的危機は「学ぶ」力の喪失、つまり辺境の伝統の喪失なのだと私は考えています。

（内田樹『日本辺境論』より。原文の一部を省略した。）

(注1) クロード・レヴィ・ストロース：フランスの社会人類学者、民族学者。

(注2) パラダイム：ある時代に支配的な物の考え方・認識の枠組み。規範。

問一 傍線部(1)「まどろんでいた」の説明として、もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 1。

- ① 批判しなかったこと。
- ② 賞賛していたこと。
- ③ 嘲笑していたこと。
- ④ 冷笑していたこと。
- ⑤ 完全に寝入っていたこと。

問二 傍線部(2)「冷水を浴びせ」の意味として、もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 2。

- ① 意見を提示すること。
- ② 氷水をかけること。
- ③ 冷静に励ますこと。
- ④ 勢いを削ぐこと。
- ⑤ 厳しく叱りつけること。

問三 傍線部(3)「野生の人々には固有の知があり」とあるが、その意味と対極にある事柄として、もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 3。

- ① コツコツと準備すること。
- ② あるものを使って工夫すること。
- ③ 未知のものでもやたらに捨てないこと。
- ④ 事前に綿密に予測し必要物を集めること。
- ⑤ そこにあるもので将来の需要に備えること。

問四 傍線部(4)「深刻な勘違い」が引き起こす結果として、適切なものを、次の①～⑤のうちから二つ選びなさい。解答番号は 4、5。

- ① 教育に携わる役人が「学ぶ力」の真の意味を誤解して教育行政に従事してきたため、辺境の伝統が喪失した。
- ② 教育に携わる役人が「学ぶ力」の真の意味を誤解して教育行政に従事してきたため、辺境の伝統がろうじて維持された。
- ③ 中国の役人が日本の位置を誤解して、十分な資源を与えてこなかったため、日本は辺境国になった。
- ④ 教育に携わる役人が「学ぶ力」の真の意味を誤解して教育行政に従事してきたため、「先駆的に知る力」を子どもたちは身につけることができなくなった。
- ⑤ 教育に携わる役人が自己の文明の知の偉大さをばかりを教育してきたため、自民族中心主義に陥った。

問五 傍線部⑤「そのような「賢い買い物」とあるが、著者が言いた

いこととしてもっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一

つ選びなさい。解答番号は 6。

- ① 豊富な資金の中から価値の最も高い商品を買うこと。
- ② 高い給料をもらうことのような実利的価値を得るために効率的に学ぶこと。
- ③ バーゲンまで待ち、真に値打ちのあるものを買うこと。
- ④ 真に値打ちのあるものであれば、定価で購入すること。
- ⑤ 将来に備えて、とりあえず何でも学ぶこと。

問六 本文の内容にもっとも合致するものを、次の①～⑤のうちか

ら一つ選びなさい。解答番号は 7。

- ① 潤沢な資源に欠ける辺境的環境では、その意味や有用性が今は不明でも、将来の生存のために不可欠であろうと先駆的に認識し、学んで行くこと、それが、他の国に伍して日本が生存していくことを可能とした。
- ② なんでも食べられる人は、食べることが可能なものと、食べると死ぬかもしれないものを経験則から識別できている。
- ③ 日本人にとって外来の制度文物は大きな恩恵であったが、それを受容するには、何よりも開放的になることが必須の能力であった。
- ④ 野生の人々は過酷な環境で生存を迫られていたが、彼らの生存をなによりも左右したのは、道具の創作に関する先駆的な能力であった。
- ⑤ 誤った日本の教育政策を改善するためには、学ぶ力または学習意欲を子どもたちにつけさせるために、学びの効果を一覧的に開示することを通じて、いわば、子どもたちにその未来を暗示することが肝要である。

問題二

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

「民俗」を対象化することにアイデンティティを置くのではなく、普通の人々の日常を描くことを目指す。そのような変化は日本に先駆けてアメリカやドイツ、中国、北欧の民俗学で生じた^(a)チヨウ流である。過去への憧憬と民族固有のルーツ探しというナショナルロマン主義に彩られたかつての民俗学は、庶民のミクロな^(b)リヨウ域における日常性や実践に関する研究へと様変わりしている。⁽¹⁾こうしたチヨウ流については多くの解説が出ているので、ここで着目したいのは民俗学における人間（ヒト）に対する捉え方、観念のあり方である。

民俗学は多様な手法や対象を内部に抱えながらも、ほぼ全ての研究に共通するのはフィールドワークを行い、エスノグラフィ（民族誌・民俗誌）を描くという一連の行為である。「野の学問」とも呼ばれてきたように、野外（フィールド）に出て他者と向き合う中で聞き取りを行ったたり、人々の暮らしを観察したりすることは、関心や手法がますます拡大・拡散していく民俗学の一つに束ねる糸だと言つてよい。フィールドで出会う他者を古くは「古老」や「話者」と呼んだり、近年では文化人類学や社会学などと同様に「インフォーマント」と呼んだりするが、いずれにしても自己と他者を含めた人間の営みと向き合うことなしに民俗学的実践は始まることはない。それは民具や文書といったモノを対象とする場合も大差はない。**A** 民俗学ではモノ自体に内在する意味や機能を明かすというよりは、庶民の暮らしにおいてモノがどのように使われたり

意味づけられたりしているかに興味を覚えてきたためである。

他者のまなざしを介して世界を理解する民俗学のようなフィールド科学において、人間という存在は学のもつとも重要な^(c)基バンである。

B、これまでの民俗学において、関心の重心は人間の思考や生き方、社会生活における他者関係や認識のあり方といった人間そのものではなく、人々が伝承してきた「民俗」にあったといえる。言い換えると、他者と面と向かいその人自身の経験や記憶に耳を傾けながらも、聞き手の関心は目の前の人ではなく、村や集団が共有している集合表象としての「民俗」にあった。

こうした事態は後に「人間不在」⁽²⁾の例として批判され、一九九〇年代以降の村落研究では「民俗」を担う集団ではなく、個人を基点としてエスノグラフィを描くべきだという主張へと繋がっていく。

しかしこうした議論へ向かうチヨウ流は、民俗学の方法論の中ではかなり早いうちから取り上げられてきた。例えば戦後すぐの時期に和歌森太郎と関敬吾が方法論に関する論争を行うなかで、民俗学の対象は「民族」なのか、それとも「民俗」なのかという議論が行われた。言い換えると民俗学が考究すべきは人間なのか、それとも人間の生み出した文化的現象なのか、ということである。その論争に明確な決着が着いたわけではないが、後の学史の中では既に述べたように「民俗」を対象化することがそのまま民俗学の必要条件になっていったことを考えると、和歌森の主張がデファクトスタンダード（事実上の標準）として採用されていくことになった。

また「常民」という概念の定義を巡って福田アジオや竹田聰洲らに

よって何度か交わされた議論は、民俗学の対象としての人間主体をいかに位置付けるかという問いへの可能性を秘めていた。しかし竹田の議論で導き出されたのは、「常民」が実体として存在するのかどうか重要なのではなく、民俗学にとっては人々の有している「常民性」を見つけていくことが重要である、という指摘であった。常民らしさ、と言い換えても良いその概念は、大月隆寛がかつて指摘したように「民俗」と何ら変わらない意味に落ち着くことになった。このような堂々巡りの陰で、他者に向き合い、人間をどのように描いていくのかという視点は深められる契機を失ったといつてよい。

その中であつて、高桑守史の提起する「伝承主体」や、それを微修正した真野俊和の「ホモフォークロリカス」という概念は、フィールドで出会う他者に向き合おうとした稀^(d)ウな概念である。しかし、これらの概念も、人が「民俗」を他者に「伝承」する限りにおいて考慮しようとするものであつて、日常的に営まれている生活の全体を捉えようという意図で組まれた概念ではなかった。例えば、高桑は「伝承主体」が「伝承母体」とほぼ同義だとしたうえで次のように述べている。

伝承母体という用語には、これまで人を捨象して集団表象としての地域を指示する用いられ方が多かった。そこで、民俗を生成し、保持管理し、変革する主体としての人間、およびその集団をより強調することに於いて伝承主体という用語を用いることにしたい。

ここに明らかかなように、あくまで「民俗」の管理人である場合のみ人間が関心の対象になる一方、新たに生起する文化に携わる際の人間は、考慮の範囲外なのである。総じて民俗学者はフィールドで生身の人間と

接しながらも、他者のパーソナルな側面や日常実践についてはあまり関心を持たず、ましてや、島村が指摘したように「伝承性」の感じられない創造的な側面には目を向けてこなかったと言つてよい。

少なくとも人間を「民俗」の容れ物としてではなく、固有名と意志を持ち「伝承」生活に決^(e)してシユウ^(e)斂^(e)されることのない日々の生活を送る主体であるということを明示した理論や概念は皆無である。そうした意味では、いかにフィールドワークや聞き書きを行い、他者を相手にしていたとしても、結果として人間不在という批判を受けることは未だに免れられるものではない。

民俗学が他者に向き合う学問分野の一種であり、直接的に対峙した調査研究手法を用いる分野であり続ける以上、「伝承」や「民俗」という無時間性の中に幽閉された既存の人間観⁽³⁾は打破していく必要がある。もともと民俗学は、その立ち上りの時期においてまさに人々の日常経験を描き、「我々」をとりまく社会や生活環境を相対化していこうとする姿勢を持っていたのであり、室井康成の言うように「民俗」というのは柳田国男の民俗学において、人々を取り巻く自明性や生活環境を指していた。だが「民俗」が指し示す意味内容はその後の民俗学ではアップデートされることなく、一九三〇年代に形成されたままの意味内容が維持され、いつしか「古さ」や「変わらなさ」というニュアンスが付帯するようになった。そして「民俗」を通じて人々の日常性を明らかにするというよりも、「民俗」それ自体の対象化が自己目的化したのである。

日本で民俗学が形成された時代と現在とでは対象となる社会の状況も違えば、各学問分野の配列状況も全く異なっており、同時代の人々の生

き方を捉えようとするには当然その時代状況を踏まえる必要があるし、
 学際的な研究動向の理論的影響も踏まえる必要がある。そうした同時代
 のコンテキストを踏まえた上で、かつ「民俗」から「人間」に視点を移
 したとき、これまでの枠組みはどう刷新できるのか。

(門田岳久・室井康成編『人』に向きあう民俗学』より。原文の一部
 を省略した。)

問一 傍線部(a)～(e)のカタカナの表記部分と、同じ漢字を含む語を、次

- の①～④のうちから一つずつ選びなさい。解答番号は 8
- (a) チョウ流 8
- ① 期限をチヨウ過する 2 面接で緊チヨウする
- ③ 時代の風チヨウに迎合する 4 計画をチヨウ整する
- (b) リョウ域 9
- ① お札をリョウ替する 2 律リョウを發布する
- ③ リョウ土を拡大する 4 リョウ心が痛む
- (c) 基バン 10
- ① バン事休す 2 バン石の体制
- ③ バン秋の季節 4 新しいバン組が始まる
- (d) 稀ウ 11
- ① ウ宙船の打ち上げ 2 蝶がウ化する
- ③ ウ量が増える 4 未曾ウの出来事
- (e) シュウ斂 12
- ① 病院にシュウ容する 2 学びのシュウ大成
- ③ 部屋から異シュウがする 4 車をシュウ理する

問二 傍線部(1)「こうしたチョウ流」の説明として、もつとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

13。

- ① 民俗学は庶民の日常性や実践について研究すべきだとする議論。
- ② 民俗学の研究対象が、「民俗」から普通の人々の日常へと変化したこと。

③ 民俗学の研究対象を、普通の人々の日常から民族固有のルーツ探しに変更すること。

④ 庶民の日常生活に注目するのではなく、「民俗」を対象とした研究の推進。

⑤ 民俗学の研究対象が、普通の人々の日常から「民俗」へと変化したこと。

問三 空欄 A に入る接続詞として、もつとも適切なものを選びな

さい。解答番号は 14。

- ① さらには
- ② なぜなら
- ③ また
- ④ そこで
- ⑤ なおかつ

問四 空欄 B に入る接続詞として、もつとも適切なものを選びな

さい。解答番号は 15。

- ① そこで
- ② ところで
- ③ にもかかわらず
- ④ であるから
- ⑤ なぜなら

問五 傍線部(2)「人間不在」の例として批判され」とあるが、それは

どのような点を批判しているか、もつとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 16。

① 民俗学の対象が、人々が伝承してきた「民俗」から、人々の日常生活へと変化してしまった点。

② 今後の民俗学が、村や集団が共有する「民俗」を研究対象としようとしている点。

③ これまでの民俗学において、その研究対象が人々の生き方や社会生活に向けられてきた点。

④ 民俗学が以前から、他者と向き合って、その経験や記憶に耳を傾けてきた点。

⑤ 従来の民俗学の関心が、目の前の人々ではなく、彼らが伝承してきた「民俗」に向けられてきた点。

問六 傍線部(3)「既存の人間観」とはどのような考え方か、もつとも適

切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 17。

- ① 従来の民俗学において、人々は日常生活を送る主体であり、また新たな文化を創造する主体であるという考え方。
- ② 人々は「民俗」を伝承すると同時に、文化を創造する主体であるという考え方。
- ③ 民俗学の研究対象は、人間そのものではなく伝承されてきた「民俗」であり、人々はそれを伝承する母体であるとする考え方。
- ④ 他者のパーソナルな側面や日常的な実践に注目するのが、民俗学の人間観であるとする考え方。
- ⑤ 民俗学は現地調査や聞き取り調査を行うことによって、日常生活を送る主体としての人間と向き合わねばならないとする考え方。

問題三

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

性格を考えることは、私たちの人生に深くかかわってくる問題である。

それは、私たちがどのように成長していくのか、その中で誰とかわか
るのかという問題にも関係する。生まれたときから気質が見られ、環境
との組み合わせの中で徐々に性格自体が変化しつつ、人生の経路が左右
されていく可能性がある。私たちが誰かと親密な付き合いをし、結婚し、
子育てをし、老いていくプロセスの中でも性格はかわってくる。もち
ろんその影響は **A** 的ではないものの、無視できるほど小さいわけ
でもない。

また、どこに住むかということにも、性格がかかわっていく。私たち
は生活している環境から何かしら影響を受け、逆にまた私たちは環境に
影響を与えていく。ある性格の人々が特定の地域に集中していくことに
よって、その地域に独特の雰囲気生まれ、さらにその雰囲気が特定の
性格の持ち主に **B** 的に映るようになる。このような性格の集積と
も言える状況は、その地域の **C** 的な特徴にも関連していく。

より身近な身の回りの環境についても、性格がかかわってくる。私た
ちは日々数え切れないほどの選択をしながら生活しており、その選択に
は個性が反映する。それは部屋の使い方から写真の撮り方、インター
ネット上の振る舞い方にまで及ぶ。

だからこそ、私たちは **そこ**⁽¹⁾ に何があるのかを知りたいと思うようにな
る。

インターネット上を検索すれば、あらゆる種類の心理検査、心理ゲー
ム、自己分析ツールへのリンクが手に入る。

学生が就職活動を行う際にも「自己分析」をすることが促される。就
職活動の中で就職適性検査や性格検査を受け、自分の性格についてあれ
これと考えさせられるような機会もある。

自己分析をして、あなたが自分の性格を知ったとしよう。信頼性と妥
当性が十分に確認されている性格検査があるとして（そういう検査がいく
らでもあるわけではないが、存在しないわけではない）、その検査を受けること
ができたとしてしよう。そして、何らかの結果が出る。あなたはその知識を、
何に使うのだろうか。

結果に示された文章を見て、「へえ、自分はこういう性格なのか」と
納得して終わりにする人も多いだろう。しかし、もっとその情報をうま
く活用する方法はないのだろうか。

性格を知ることが、自分自身がより良く生きていくためのヒントにつ
ながる。それは単に「自分はこういう性格だから、こういうことをしが
ち」だとか「自分はこういう性格だから、こういう性格に向いている」
とか、「こういう性格だったら成功しやすいのに」などという、一対一
の対応という問題ではない。

どのような性格特性であっても、**D**。

たとえばある性格は、他の性格特性や心理的狀態との組み合わせに
よって、まったく違う結果を生み出す可能性を秘めている。たとえば、
^(注1)ビッグ・ファイブのうち勤勉性は、学業成績にも仕事のパフォーマンス

にも、寿命の長さにも関連する、それをもつだけで何でもできそうな

性格特性に思える。しかし、勤勉性の高さが神経症傾向の高さと共存すると、それは完全主義につながる。完全主義とは、高い目標を抱いてその目標を達成しようと試み、少しでも目標を達成できないとすべてが失敗だと考える傾向のことを指す。

そして、その高い目標が常に達成できるわけではないという点に、完全主義の大きな問題がある。周りの人々が自分の高い目標の達成をサポートしてくれるような恵まれた環境に身を置いていけば、周りの人々は大変だろうが本人に大きな問題は生じないだろう。しかし、時に高い目標は現実離れしたものとなり、また実際の生活の中では不確実な要素も多くなるため、どれだけ達成しようとしてもできない場合がある。しかし完全主義はそれを許さず、他の人から見たらそれほど大きな失敗に見えないにもかかわらず、本人はそれをすべて失敗だとみなす傾向がある。すると、落ち込みや抑うつ、自己嫌悪といったあまり好ましくない結果へとつながっていく。

いずれにしても、単独で考えれば好ましい性格特性である勤勉性も、他の性格特性や状況との兼ね合い次第で、好ましくない結果へとつながってしまうのである。だから、たとえ自己分析によって自分の性格を知ったとしても、それをうまく活かしていくことが大切である。

1 毎日何かを続けるには、どのような性格特性をもつのがよいのだろうか。

2 たとえば、粘り強く最後まで目標に向かってやり抜こうとする性格特性であるグリット (Grit) が高い人であれば、きつと毎日の目標に対してしっかりと取り組み、その試みは長い間続いていくことだろう。もし

かしたら、その活動をする中でさらに難易度の高い目標を立てて、チャレンジしていく様子が見られるかもしれない。

3 では、あまりグリットが高くなく、注意があちこちに散ってしまうような人の場合はどうだろうか。そういう人物は課題に集中して、計画的に段階を踏んで作業を行っていくことは苦手そうである。スマホの通知が画面に表示されてつい手にとったり、本棚を見るとすぐに「あの本、面白かったな」と手が伸びてしまったり、ちよつとしたことで注意がそれてしまうということが、このような人の行動としてありがちである。

しかし、このような人でも、課題を達成することで得られる報酬を明確にし、その報酬が得られるステップを細かい段階に設定してみてもどうだろうか。ひとつひとつのステップをクリアすることのメリットを明確に感じられるように工夫することで、よりうまく課題に取り組める可能性がある。このように、自分がグリットのような性格特性に欠けており、注意散漫な特徴をもつことを自覚するというのは、自分の課題への向き合い方を工夫する契機となりうる。

4 また、神経症傾向が高く不安が強い人物の場合はどうだろうか。このような人物の場合、課題をうまくこなせるといふ見込みを十分にもつことができず、きつとうまくいかないだろうと将来をネガティブに捉えがちになるであろう。しかしこのような人物の場合、デメリットを抱く対象を変えていく方法によって、課題を進めていく動機づけを生み出すことができるかもしれない。つまり、締め切りを過ぎてしまうことや、課題ができないことに焦点を当てるのである。すると、その不安を和らげるために、早く課題を遂行しようとする動機づけが生じる。締め切りが

近づいて不安になるくらいなら、早めに手をつけて終わらせようと考えようになる。そのプロセスは楽なものではないかもしれないが、結果的に課題を達成できれば、その不安は大きく和らぐはずである。

5 もしも自分が外向的な性格だと自覚するのであれば、課題に向き合う際にひとりで言うよりも、誰かと一緒にコラボレーションするような仕組みを導入するのがよいだろう。図書館にひとりでこもって作業するよりも、勉強会を開いて皆でスキルアップを試みる。ひとつの課題をひとりでではなく、チームで取り組む。このような仕組みを取り入れることで、外向的な人物は「楽しい」という実感を得やすく、課題のパフォーマンスも向上するだろう。逆に、もしも自分が内向的な性格だとわかったのなら、誰にも邪魔されないような静かな場所を用意して、自分のペースで課題に取り組むようにしよう。おそらく、途中で作業を邪魔されることは、このような人にとっては非常に苦痛だろうから。

人にとって心地よいのは、どれくらい静かな環境なのだろうか。激しい音楽を聴きながら作業をしたほうがはかどるのだろうか、静寂の中で取り組みたいだろうか。また、どのような環境で暮らすのが心地よいのだろうか。人通りの多い都会で暮らすのが心地よいのか、人が少なく交流が多い地域なのか、公園や森の近くが良いのか、海の近くが良いのか。また、誰とどれくらいの関係をもつと、心地よく感じるだろうか。家族や友人と密接な関係をもつことを心地よく感じるだろうか、あまり深い人間関係をもたないほうが心地よいと思うだろうか。実際に顔を合わせると直接の人間関係を営むことが心地よいだろうか、それともインターネット上の関係のほうが気楽で良いと思うだろうか。インターネット上

であつても、どのSNSやツールを使うことが心地よいだろう。自分や相手の顔が見えるほうが良いだろうか、それとも音声だけやテキストだけのほうが好ましく感じるだろうか。

人が日常生活の中で選択を繰り返していく中で、それぞれの人にとって心地よい場所に収まっていくような選択がなされる。そういう何気ない選択に、それぞれの人の性格が関連しており、その心地よさに従って居心地のいい場所へとわかれていく。その選択を通じて環境を変化させていくことで、大人になってからも性格は少しずつ変化していく。そして、心地よい場所が見つかったと徐々に性格の変化は少なくなり、安定していく。

私たちが自分の性格について知るメリットは、自分にとって居心地のいい場所がどこであるかを理解し、その居心地のいい環境を自分自身で作らざることにつながる点にある。

それは決して、「こういう性格なのだからこれをあきらめなさい」と、目的や目標を失わせることを意味するものではない。時に性格の研究は、「こういう性格はこういう職業に向いている」と、その他の道筋を断つかのような結果を報告することもある。しかし、自分が望むこと、自分がやりたいこと、またしなければいけないことは、極力達成していきたいものである。それは、自分自身を幸福にするひとつの重要な行為だからである。

自分が「こうありたい」という目標を達成するために、いかに自分自身を目標に向かわせつつ居心地のいい環境に置くか、工夫していくヒントを得るところに、自分の性格を知る意義がある。自分の性格を知ること

とは、人生の幅を狭めることなく、広げることに役立てていきたいものである。

(小塩真司『性格とは何か』より。原文の一部を省略した。)

(注1) ビッグ・ファイブ：性格を五つの要素(勤勉性、神経症傾向、外向性、開放性、協調性)から理解する心理学の理論。

問一 空欄 A ～ C に入ることばの組み合わせとして、もっとも適切なものを、次の ① ～ ⑥ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 18。

| | | | | |
|---|----|----|----|---|
| | | A | B | C |
| ① | 決定 | 社会 | 魅力 | |
| ② | 魅力 | 決定 | 社会 | |
| ③ | 社会 | 魅力 | 決定 | |
| ④ | 決定 | 魅力 | 社会 | |
| ⑤ | 魅力 | 社会 | 決定 | |
| ⑥ | 社会 | 決定 | 魅力 | |

問二 傍線部(1)「そこ」が指すことばを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 19。

- ① 個性 ② 環境 ③ 地域 ④ 性格 ⑤ 選択

問三 空欄 D に入る文章として、もっとも適切なものを、次の

- ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 20。
- ① 他人にはうかがい知れない面がある。
 - ② 否定的な面をもっている。
 - ③ 多面的な特徴をもっている。
 - ④ 完全主義な一面をもっている。
 - ⑤ 好ましくない結果につながっていく。

問四 傍線部(2)「それをうまく活かしていくこと」の例として適切でないものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 21。

- ① グリットが高い人が、難易度の高い目標に挑戦すること。
- ② 注意が散ってしまう人が、課題達成の段階を細かく設定すること。
- ③ 不安が強い人が、課題をうまくこなす見込みをもつこと。
- ④ 外向的な人が、勉強会を楽しみながら課題に取り組むこと。
- ⑤ 内向的な人が、図書館にひとりでもって作業すること。

問五 ①から⑤の段落を通じて、一つの見出しをつけるとして、

もっとも適切なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。

解答番号は 22。

- ① 毎日何かを続けるには
- ② 多様性を受け入れる
- ③ 性格を乗り越えて
- ④ 課題に向き合う
- ⑤ 性格を逆手にとる

問六 本文の内容を表す記述として誤っているものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 23。

- ① 私たちは性格によって住む場所を選び、そこに住む人々が生み出す環境の影響を受けて性格も変化する。
- ② 自己分析をして、納得する結果が出たとしても、性格は一面的ではないから信用すべきではない。
- ③ 勤勉な性格は好ましい特性だが、完全主義という好ましくない傾向を抱えることもある。
- ④ 性格について知ることとは、自分にとって居心地のいい環境を生み出すことにつながる。
- ⑤ 性格について知ることを、自分に合わない道を探るために使うべきではない。

問題四

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

私たち人間は、万物の霊長と言われる。そのせいか、人間を基準にして、他の生物の生き方を見てしまいがちである。そして、人間に近い生き物を「高度な生き物」として大切にしたり、人間とあまりに違う生き方をしている生き物を「下等な生き物」としてさげすんだりしてしまうのだ。

しかし、すべての生物が、この世の中を生き抜くように高度な進化を遂げている。

A、人間にとって脳は一つしかないものと決まっているが、昆虫は一つではなく、複数の脳を持っている。そして、その脳をそれぞれの足の付け根に配置しているのである。

B、昆虫は刺激を受けると、すぐに行動に移ることができる。ゴキブリを叩たたこうとスリッパを振り上げると、ゴキブリはその空気の振動を察知して、すぐに逃げ出すことができる。

人間のように感覚器官で得たすべての情報を、脳という高度に発達した情報システムに集めて、判断する方法も、一つの進化の例に過ぎない。**C**、ゴキブリが人間と同じように高度な脳を発達させて、危機が迫っているのか否か、逃げるべきか逃げざるべきかと、熟考していたら、簡単にスリッパにつぶされてしまうことだろう。

D、ミツバチは人間には見えない紫外線を見ることができる。どうして見えるのかと問えば、人間はどうしてこの色が見えないのかとミ

ツバチに聞かれるだろう。コウモリは人間には聞こえない超音波を聞くことができる。超音波が聞こえるとはどのような感覚なのかと問えば、超音波が聞こえない世界はどのようなものなのかと質問されるだろう。

何も人間の生き方が当たり前ということではない。むしろ、生き物たちに言わせれば、余計なことに頭ばかり使っている人間のような生き方こそが珍しいかも知れないのである。

お彼岸には、祖先を供養するためにお墓参りをする。

あなたの祖先をたどってみると、どこまで遡れるだろうか。三代前は、もうわからないという方もいるだろうし、十代以上も家系が遡れる方もいるだろう。あなたの祖先が何代前まで、何年前まで遡れるかはわからないが、数十万年前までたどっていくと、人類は共通の祖先にたどりつくだろう。そして、二〇〇万年も遡れば、原人も含めたヒト属の祖先に行き着く。もつと遡れば、人類は、チンパンジーやオランウータンなど類人猿と共通の祖先を持ち、類人猿と親戚どうしであることがわかるだろう。

類人猿は小さなサルから進化を遂げたし、サルも含めた哺乳類の祖先は、現代のネズミのような小さな生物であったと考えられている。

この哺乳類は爬虫類の一部から進化したとされている。そして遡れば爬虫類は両生類から進化をし、両生類は魚類から進化した。四億年あまり昔の古生代シルル紀にまで先祖をたどれば、人間もすべての動物も、鳥もトカゲもカエルも魚も、皆、同じ祖先に遡ることができるのである。

まだまだ祖先をたどってみよう。さらに遡って六億年も昔になれば、私たち脊椎動物の祖先と、昆虫たち節足動物の祖先は共通になる。

こうして辿^{たど}って行けば、ついには私たち動物も植物も同じ祖先に辿^{たど}つく。考えてみれば、植物も、私たちと同じ祖先を持つ親戚のようなものなのだ。

はるか昔にまで思いを馳^はせれば、私たちはお墓参りで、すべての生物の祖先に手を合わせなければいけないのである。

(2) 植物と人間は親戚^{なまじ}どうしとは言っても、私たちはずいぶん昔に、その袂^{たもと}を分かつてきた。今となつては、植物という生き物は、人間の生き方とはあまりにかけ離れている。植物は、動物のように動き回ることなく、地面に根を張り、餌を探すこともなく、根から水や養分を吸い、光を浴びることで生きていくことができる。どうして植物はこんなにも奇妙な生き方をしているのだろうか。

奇妙な生物である「植物」の進化を見ていくことにしよう。

地球上に生命が生まれたのは、三八億年前。その頃には、動物と植物の区別はなかった。

植物が植物たるゆえんは、光合成を行うことにある。つまり、細胞の中に葉緑体があるのである。

それでは、植物細胞の中の細胞内器官である葉緑体は、どのようにして作られたのだろうか。

① 共に暮らすことで、単細胞生物は、葉緑体となるバクテリアから栄養分をもらうことができるし、取り込まれたバクテリアもまた光合成では作りだせない無機塩等を単細胞生物からもらうことができる。こうして、共に利益のある共生関係が作られたのである。

② それでは、どのようにして光合成を行う単細胞生物と、大きな単細胞

生物との共生が始まったのだろうか。そんな昔のことは、もはや推察するしかない。しかし、現在でもアメーバのような単細胞生物は、餌となる単細胞生物を細胞内に取り込んで、消化する。そのため、最初に大きな単細胞生物が、葉緑体となるバクテリアを取り込んだと考えられている。しかし、このバクテリアは消化されることなく、その細胞の中で暮らすことになったのだ。

③ それにしても、植物細胞も、祖先は活発に動き回り他の生物を捕えて食べていたことには驚かされる。それが、光合成を行う葉緑体を手に入れたことによって、だんだんと動かなくてもよくなったのである。

④ じつは、葉緑体はもともと、独立した生物であった。これは、生物学者のマーギュリスが提唱した「細胞内共生説」である。葉緑体は、細胞の中で独立したDNAを持ち、自ら増殖していく。そのため、光合成を行う単細胞生物が、他の大きな単細胞生物に取り込まれて、共生しているうちに、細胞内器官となったと考えられているのである。

細胞内器官として、酸素呼吸をしてエネルギーを生み出すミトコンドリアも、葉緑体と同じようにして細胞内に取り込まれたと考えられている。

ただし、ミトコンドリアは植物細胞だけでなく、動物細胞にもある。つまり、ある単細胞生物がミトコンドリアと先に共生をしていて、その後、一部の細胞が、さらに葉緑体となるバクテリアを取り込むことによって動物の祖先と袂^{たもと}を分かち、植物の祖先になったと考えられているのである。

細胞内共生説を彷彿^{ほうふつ}とさせるような共生は、現在でも見られる。

たとえば、ミドリアメーバと呼ばれるアメーバの仲間も、体の中に葉緑体を行うクロレラを共生させている。また、コンボルタと呼ばれる扁形動物は体内に藻類を共生させている。そして、光合成から得られた栄養分を利用して暮らしているのだ。

ゴクラクミドリガイと呼ばれるウミウシの仲間も、奇妙な生き物である。このウミウシは、エサとして食べた藻類に含まれていた葉緑体を体内に取り入れ、その葉緑体を働かせて、栄養を得ているのである。

そういえば、人間も口から体内に入った無数の腸内細菌と共生している。

食べたものと共生するというのは、そんなに珍しいことではないのだ。

動物と植物とは、まったく相容れない別の生物であるというイメージがあるかも知れない。しかし、そうとばかりは言い切れない。動物と植物の狭間にあるような生き物も存在するのである。

最近、ユーグレナという健康食品を耳にするようになった。ユーグレナは和名をミドリムシという単細胞生物である。

ミドリムシは奇妙なことに、動物図鑑にも名前が記載されるし、植物図鑑にも名前が記載される。ミドリムシはその名のとおり、葉緑体を持ち、緑色をしている。葉緑体を持つというのは、植物の特徴である。ところが、このミドリムシは、鞭毛を持ち、泳ぎ回る。この動き回る点は動物である。つまり、ミドリムシは植物の性質と動物の性質を併せ持っているのである。

ミドリムシの進化は明らかではない。しかし、鞭毛を持つ生物が、葉緑体となるバクテリアと共生することで進化を遂げたと考えられる。

日本には四七の都道府県があるが、地面の上に県境が引かれているわけではない。都道府県の境は、地図の上で人間が決めたものである。

富士山のすそ野は、どこまでも広がっている。一体、どこまでが富士山なのだろうか。明確な境界があるわけではないから、日本全体が富士山とも言えるし、富士山と言う実体などないのだとも言える。

本当は、自然界にあるものに一切の境はない。境目というのは、分類し、理解をするために人間が勝手に定めたに過ぎないのである。

野菜と呼ばれる植物があるが、スイカやイチゴが野菜になるか、果物になるかは、国によって異なる。アメリカではトマトが野菜か果物かで裁判が行われたくらいだ。野菜という明確なグループが存在するわけではなく、人間が野菜という範囲を決めているに過ぎないのだ。イルカとクジラは、単に大きさが三メートルよりも小さい種類をイルカ、三メートルよりも大きい種類をクジラと呼んでいる。生物学的にイルカとクジラの明確な違いがあるわけではないが、人間が勝手に線引きをしているのである。このような人間が勝手に定義づけて分類しているものを「人為的分類」という。

しかし、イルカとタンポポは、明らかに違う。このように、自然界にあるように見える分類を「系統分類」という。

自然界には知られているだけで二〇〇万種もの生物がいる。この無数にいる生物を、「分類学の父」と呼ばれる一八世紀の博物学者リンネは、まず線を引いて、植物界と動物界の二つに分けた。これを二界説という。ところが、やがて微生物がたくさん見つかってくると、原生生物を加えて三界説が唱えられた。

生物の世界を、どのように区分すべきか。驚くことに科学技術が進んだ現代においても、その分類方法が確定しているわけではない。

しかし、それもやむを得ない話である。東北と九州が明らかに違っても、日本列島には何の境界線も引かれていないように、イルカとタンポポが明らかに違っても、生物の世界にも明確な境界があるわけではない。

自然界は何の境界もないボーダレスの世界である。しかし、知能で情報を整理する人間は、境界を作って区別しないと理解できないので、線を引いているのである。系統分類とはいっても、所詮は、人間が自分たちのために作った分類に過ぎない。

生物の分類の基本単位を「種」という。

イヌとネコは、見るからに違う。これは幼稚園児でも区別できるだろう。人間は、はるか昔から生物を区別し、名前をつけてきた。

イヌとオオカミも違う。絵本では、イヌは桃太郎に連れ添って鬼が島に行くし、オオカミは三匹の子豚の家を吹き飛ばす。オオカミが桃太郎のお供になったり、イヌが三匹の子豚や赤ずきんちゃんを襲うことはない。しかし、最近の分類学では、オオカミとイヌとは同じ種であるとしている。どうして、イヌとオオカミは同じ種になってしまうのだろうか。

リンネは、学名をつけ一つ一つの生物種を分類した。その当時は、幼稚園児がそうであるように、見た目で生物種を分けていた。しかし、分けていたはずの二つの生物が、交雑して雑種が生まれたり、連続的に形態が変化したりして明瞭に線引きできないものもある。

このような問題に対して、進化学者のダーウィンは、「もともと分けられないものを分けようとするからこんなことになるのだ」と記してい

る。ダーウィンは、生物種は神が作ったものではなく、進化してきたことを明らかにした。そのため、種は変化し続けているとしたのである。

現代では、生物種は、「他の個体群と交配しない生殖的隔離機構があること」で区別されるという。イヌとオオカミは、交雑することができる。そのため、同じ種なのである。ただし、イヌとオオカミは、まったく同じということではない。そこで、種の下に、もう一つ亜種という階層を設けて、イヌとオオカミは同種だが、亜種が違うということになっている。

しかし、これでめでたしめでたしというわけにはいかない。

種のご概念は、動物では明確であるが、植物ではなかなか当てはまらない。植物は、別種とされていても、種間交雑して種子を作ることがある。

また、植物は種子を作らずに、もっぱら栄養繁殖で増えるというものも少なくない。

タンポポとアサガオが違うことは幼稚園児でもわかるのに、「種」という概念は、未だに明確になっていないのだ。

それも、仕方のない話である。そもそも、自然界には区別はない。区別しなければならぬ理由もない。それを、人間の頭が理解するために、区別して整理しようとしているのである。

植物は、人間が思う枠を超えて、子孫を残そうとする。そこには、何のルールもない。植物の生き方は、人間が思っているよりも、ずっと自由なのである。

(稲垣栄洋『植物はなぜ動かないのか——弱くて強い植物のはなし』より。原文の一部を省略した。)

問一 傍線部(1)「万物の霊長」の説明として適切ではないものを、次の

- ① ④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 24。
- ① 生きとし生けるものすべての最上位にくる存在
- ② 世界の創造主
- ③ 人類
- ④ 霊妙な力を備えていて、他の中で最も優れているもの

問二 空欄 A ～ D に入ることばの組み合わせとして、もっとも

も適切なものを、次の ① ～ ⑥ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 25。

| | | | | | |
|---|------|------|-----|------|---|
| | | | | | A |
| ① | たとえば | しかし | だから | あるいは | |
| ② | たとえば | そのため | もし | あるいは | |
| ③ | たとえば | そのため | もし | たとえば | |
| ④ | つまり | しかし | だから | あるいは | |
| ⑤ | つまり | そのため | だから | たとえば | |
| ⑥ | つまり | しかし | もし | たとえば | |

問三 傍線部(2)「袂を分かつて」の本文に即した意味として、もっとも

- 適切なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選びなさい。解答番号は 26。
- ① 縁を切る
- ② 仲違いする
- ③ 別々の進化を遂げる
- ④ 分割する
- ⑤ 分裂する

問四 段落 ① ～ ④ は、本来の順番を変えています。本来の順番に並び替

べなさい。解答番号は 27 ～ 30。

問五 筆者の説明と合致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ

選びなさい。解答番号は 31。

① 地球に生命が誕生した三億八千万年前、動物と植物の区別は存在せず、両者の祖先は同じであった。

② 私たち人間は、往々にして、自らを基準にして他の生物の生き方をランク付けしがちであるが、すべての生物はそれぞれの生き残りのために高度に進化してきており、一つの基準で評価することはできない。

③ 光合成を行う単細胞生物である葉緑体を取り込むことで、植物は地面に根を張り、水や養分を吸い、光を浴びて生きていくことが可能となり、動物のように動き回る必要がなくなった。

④ ユーグレナは葉緑体を持ち、緑色で植物のように見えるが、鞭毛を持ち泳ぎ回るので生物学的には動物に分類される。

⑤ 現在知られているだけで二〇〇万種もの生物が存在するが、それらの分類はもっぱら人間が世界を理解するために設けた基準に拠っており、自然界そのものはボーダレスな世界である。